

はじめに

まず、ぼくがなぜ今、英語の発音についての本を書こうとしているのか、簡単に説明しましょう。

ぼくは30年以上日本で暮らしています。日本人と英語の関係について、よくわかっているつもりです。カタカナで書かれる外来語はもはや英語ではなく、日本語の一部になっていることももちろん知っています。和製英語は自分では極力使わないようにしていますが、この本でその間違いを正そうと思っているわけではありません。

この本を書こうと思ったきっかけは、2003年からぼくが出演しているNHKワールドTVの番組『Begin Japanology』（途中まで『Weekend Japanology』）でした。この番組は日本の文化に関係したさまざまなテーマについて海外に向けて放送しているもので、できるだけ初歩的なことをわかりやすく解説する番組ですが、内容はすべて英語です。日本国内でも放送されており、海外向けに制作されていることがわからない視聴者も

いるようですが、英語でやっているのはそのためです。

最近では1人で司会をしています。当初は司会者が2人で、スタジオで専門家のゲストとともに、ビデオを挟みながら話を進めるという構成でした。ゲストはほとんどが日本人で、いろいろなことについて英語で話してもらうので難しいこともあります。数年間、この番組を担当しているうちに、特に大きなハードルがあることに気づきました。それが「発音」でした。

英語がかなり話せる方でも、ときどき話の内容がわかりにくくなることがあります。これはカタカナ発音をしているからで、長年日本に住んでいるぼくには理解できますが、世界のどこかで何気なくテレビを観ている視聴者にわかりにくいと思うと、その場で自分で言い換えたりしていました。しかし、何度もそれを繰り返すとゲストに対して失礼ですし、せっかく文法もわかっている、語彙もあるのにもったいないと思うことがありました。

日本人同士で通じる英語が英語圏の人間にはなかなか通じない場合が多いのは、日本の学校で教えている英語が海外で使うためのものではなく、大学入試に合格するためのものだからでしょう。またカタカナ発音で教えるのでコミュニケーションの道具になりにくいのも当然でしょう。

ちょっと前に、ヒマラヤ山脈で登山家のガイドを務めるネパールのシェルバに関するドキュメンタリーをテレビで観ました。彼らはさほど高度な教育を受けているわけではなく、語彙も文法もそこそこですが、英語を話すときの発音がいいので、とてもわかりやすいです。つまり、彼らは実際に英語圏の人たちと接することが多く、自分の耳に頼りながら英語を学んでいます。

また、最近ヨーロッパやアメリカへ旅行すると中国人や韓国人の観光客を見かけることが非常に多くなってきましたが、平均的に彼らが話す英語は日本人の英語よりわかりやすいと思います。これは言語の音感の

違いによる部分もあるかもしれませんが、やはり耳に頼っている印象を受けます。

日本ではどうしても目から入ってくる情報で判断して外国語を発音するようです。これは大変不利なことだと思うのですが、それにしても明らかに間違った表記が多すぎます。

英語が母語の人間が英語の文章を見ると、仮に知らない単語であったとしてもその綴りから発音がすぐにわかります。これは発音を司るルールがあるからです。

そうしたルールさえ覚えれば、英語の発音は難しいことではないのに、日本の学校でそのルールをきちんと教えていないのはなぜでしょうか。この本の目標はそういった基本中の基本を知っていただくことです。

さて、これは誰のための本か。

日本人の英語発音について批判的なことを言うと、「英語圏の人たちの日本語発音だってひどいじゃないか」と反論する方がいます。その通りです。しかし、彼らの多くは日本語に何の興味もなく、日本人と日本

語で話したいとも思っていないはずです。同じように、日本人同士だけで通じればいいという方には無理やりぼくの話に付き合っていたらつもりはありません。あくまで英語圏で通じる英語を話したい方をこの本の読者と考えています。完璧な英語という意味ではなく、極端に言えば、文法が怪しくても、単語がめちゃくちゃに並んでいるだけでも、発音がわかりやすければ通じるものだと思います。

最初にお断りしなければならないことが二つあります。

一つはこの本で基準にする英語発音はイギリスの標準的な発音です。自分がイギリス人だからというのではありません。アメリカ英語の発音はあまりにも日本語の音感と離れすぎているので、日本人がそれをマスターするのに相当の努力が必要ですし、中途半端にアメリカ風に話そうとするとむしろ余計に通じなくなることが多いのです。特に母音は極端に違います。

例えば、日本語の「お」の音は、イギリスでは近いも

のがありますが、アメリカになると長いoは「オウ」、短いoは「ア」、この二つしかありません。それもカタカナで表記するとまた微妙に違うのです。

もう一つのお断りは発音の表記についてです。日本人の英語発音に何よりも危害を加えてきたカタカナを、本当は一切排除したかったのですが、日本人関係者全員の反対を押し切ることができなかったので、アルファベットの表記と並記することになりました。ただ、どうしても英語の音を表せないカタカナの場合は、色を薄く印刷していますので、なるべくなら無視していただきたいと思います。

さて、使わざるをえないカタカナですが、どんな表記にすべきか悩みます。というのは、ふだん日本語で原稿を書いているときは、日本で一般的に通じている表記を使うことが多く、厳密に言えば英語発音という意味では間違っている場合も多いわけです。しかし、この本のためには正しい発音にこだわりたいので、み

なさんには慣れない表記があったり、ぼくがいつも使うのと違ったりするかもしれません。あらかじめご了承ください。

ピーター・バラカン